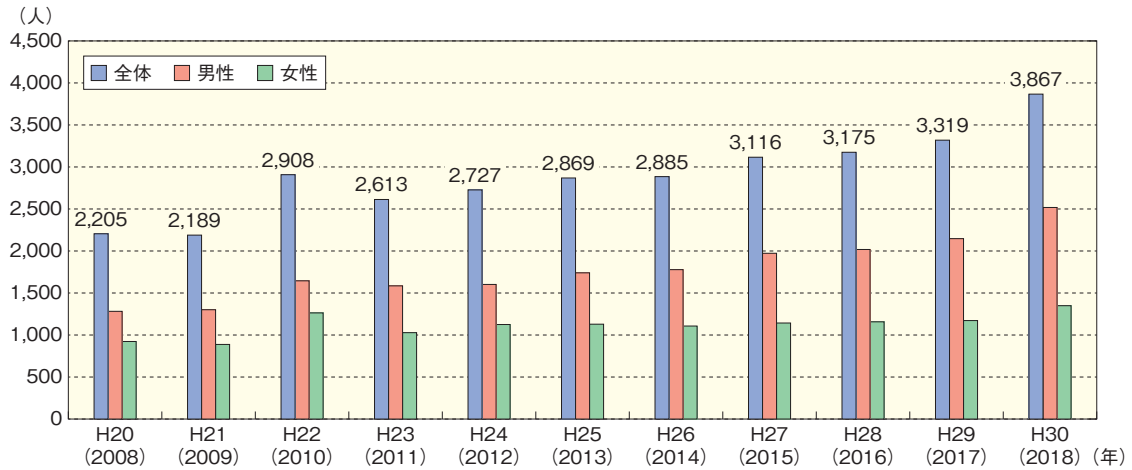


図表1-2-2 東京23区内における孤独死の推移（65歳以上の単身世帯の自宅での死亡者数）



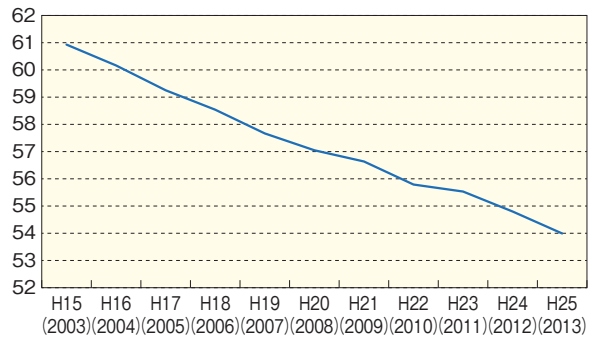
資料：「東京都監察医務院で取り扱った自宅住居で亡くなった単身世帯の者の統計」（東京都福祉保健局東京都監察医務院）を基に国土交通省都市局作成

一方、内閣府による「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」では、7割以上の方が何らかの活動に参加したいと回答しており、他者との交流を持つことに対する意識が高いことが分かる。参加したい具体的な活動内容については、健康やスポーツだけでなく、趣味や地域行事等、多岐にわたっており（図表1-2-4）、このような高齢者のニーズに応え、その孤立化を防止するためには、高齢者の心の豊かさや生きがいづくりにつながる、多世代間の交流や高齢者による社会参画の機会創出を促進する取組が重要である。

図表1-2-3

東京都における町会・自治会加入率の推移

(町会・自治会加入率：%)

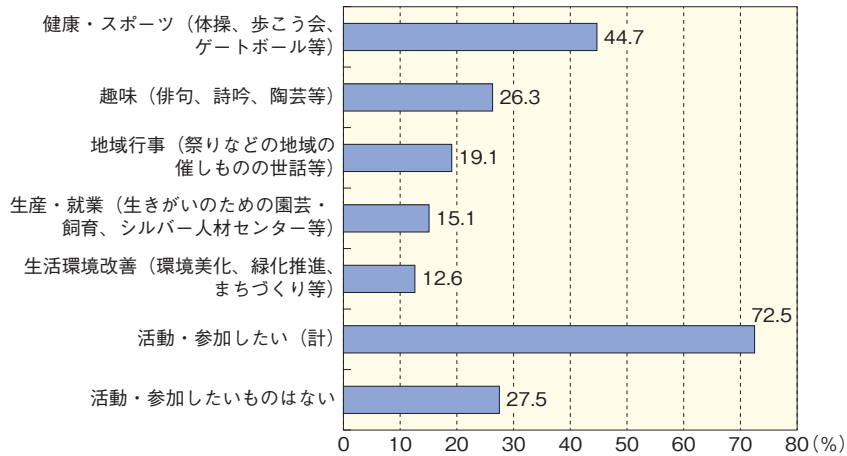


資料：「東京の自治のあり方研究会（H27）」（東京都）

※事務局による各区市町村ヒアリング結果により集計。

平成15年から25年までの10年間の数値が把握されている33区市町村の平均値を集計。

図表1-2-4 高齢者が参加したい活動（上位抜粋）



資料：「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査（H25年）」（内閣府）を基に国土交通省都市局作成

2. 多世代間の交流の促進

①官学連携団地活性化推進事業（埼玉県春日部市）

大学生等の地域貢献活動を通じた多世代間交流×団地の活性化

春日部市の武里団地は、UR都市機構が管理する約5,000戸の大型団地であり、昭和41(1966)年に入居が開始され、当時は東洋一のマンモス団地と呼ばれていた。しかし、近年、入居者の急激な高齢化が進展しているほか、入居者自体の減少も進んでいる。

このような状況を受け、市では、平成23(2011)年から、地元の大学や専修学校等と連携し、団地に居住し、かつ、地域貢献活動に取り組む大学生等を対象に、家賃や通学費用の一部を助成し、団地への入居促進やその活性化に向けた取組を行っている。

学生が行う地域貢献活動としては、夏祭り等の団地自治会が主催するイベントへの運営協力・参加がある。物資の運搬やテントの組み立てを行い、イベント当日の会場アナウンスで会場を盛り上げるとともに、子どもの見守りも行っている。また、キャンドルナイトなどの学生自主企画イベントも行われており、地域の子ども達も交えた多世代間の交流を促進し、高齢入居者の孤立化の防止を図るとともに、学生の入居・活動による団地の活性化が期待されている（図表1-2-5）。

図表1-2-5 武里団地における多世代交流イベント（夏祭りの様子、キャンドルナイトの様子）



資料：春日部市提供

②喫茶ランドリー〔株式会社グランドレベル〕

家事室付き喫茶店×地域住民の交流促進

株式会社グランドレベルは、「1階づくりは、まちづくり」との考えのもと、人々のための居場所となる様々な空間づくりを行っており、その一つが、家事室付きの喫茶店「喫茶ランドリー」である。平成30(2018)年1月に墨田区の住宅街にある建物の1階にオープンしたこの店は、手袋の梱包作業場であった空間を改装し、店内に洗濯機や乾燥機、ミシンやアイロンなどの家事が行えるスペースと、喫茶スペースを併設した施設となっており、店内スペースのレンタルも行っている。

高齢者から子ども、主婦、サラリーマンまで、地域の多様な人々に、ものづくりやワークショップなど様々な目的で利用され、私設の公民館のような役割を担っている。施設に集う人々の間では、知らない人との会話も生まれ、新たなコミュニティの創出にもつながっている。

また、令和元(2019)年10月には、3店目の喫茶ランドリーが、神奈川県座間市のホシノタニ団地にオープンした。ホシノタニ団地は、高齢単身世帯の入居が多い市営住宅と、30、40代の子育て世帯の入居が多い一般住宅が共存していることから、今後、喫茶ランドリーに幅広い世代の地域住民が集い、多世代間の交流が広がることが期待されている（図表1-2-6）。

図表1-2-6 喫茶ランドリーの外観及び利用者の様子（東京都墨田区）



資料：外観写真は阿野太一、利用者の様子は株式会社グランドレベル提供

3. 高齢者の社会活動への参画の促進

①鎌倉リビングラボ〔神奈川県鎌倉市〕

高齢者の社会参画×地域コミュニティの活性化

鎌倉市では、平成29(2017)年1月より、住民、行政、企業、大学等の多様なステークホルダーの共創による「鎌倉リビングラボ」を設立し、運用を開始した。リビングラボとは、まちの主要な役割である住民が主体となって、暮らしを豊かにするための物・サービスを生み出すことなどを通じて、暮らしをより良いものにしていく活動である。主にヨーロッパで広まってきているが、近年日本でも注目されてきている地域・社会活動である。

鎌倉リビングラボでは、特に高齢化が進む今泉台地区を、超高齢社会の先進地域として、世界が迎える長寿社会のニーズにかなう暮らしを豊かにするためのモノやサービス、まちの仕組みを、住民が主役となって生み出し、そこから新しい価値を創出する活動が行われている。

具体的には、東京大学高齢社会総合研究機構によるコーディネートのもと、高齢者をはじめ

とする住民が望むまちの未来やライフスタイル像をワークショップ等の対話から抽出し、それを叶える具体的な商品、サービスを企業とともに試作し、住民が試作品等を実際に試用し、住民の意見を引き出すことにより、生活者目線に立った使い勝手の良い商品の開発・改善につながるという活動が行われている。生活の現場で住民が開発の初期段階から主体的に参加するのが特徴で、これまでテレワーク用家具などが商品化された。

今後、鎌倉リビングラボは、引き続き産官学民の連携のもと、様々なテーマを設定して新たな企業や団体、住民の参加を募りつつ、活動を広げていく予定である。

このような長寿社会のニーズを踏まえた産官学民の連携による住民中心のイノベーション創出活動の過程で、高齢者の社会参画の促進や、地域コミュニティの活性化に貢献することが期待されている（図表1-2-7）。

図表1-2-7

国際産学共同研究相手であるスウェーデンとの多世代ワークショップ及び平成30(2018)年のスウェーデン国王夫妻と高円宮妃久子殿下による御視察の様子



資料：鎌倉市提供

②小さな公園活用プロジェクト〔東京都豊島区〕

中小規模公園の再生×高齢者から子どもに至る様々な住民の社会参画等

豊島区は、もともと大規模な公園が少なく、区民一人当たりの公園面積は23区中最も小さい。一方で、区内には、160箇所以上もの公園・児童遊園が点在し、区の面積に対する公園の数の割合は、23区でもトップクラスである。これらの多くは、中小規模であるが、十分活用されてきたとは言い難く、区としては、これらの公園・児童遊園を、住民にとって魅力ある地域のコミュニティの場として再生する取組を進めている。

この一環として、区は、地元に本社を置く民間企業との協働プロジェクトとして、西巣鴨二丁目公園と上り屋敷公園の2公園をモデル公園として、園内の施設リニューアルや新たな活用方法について検討を実施。両公園では、平成30(2018)年10月から、公園周辺の住民や高齢者施設、保育園、商店、事業者等の方々が参加する「井戸端かいぎ」を継続的に開催。参加者が公園の現状に関する「見つめ直し」を行うことから始め、公園の再生に関する意見交換を行い、「井戸端かいぎ」の場でも出された住民の多種多様なアイデアをもとに、公園の中心にあるシンボルである樹木の周りにツリーベンチを設置する等、様々な工夫を施した上で、令和元(2019)年12月に、公園をリニューアルオープンした。「公園でくつろぎたい」との住民の意見に応えるため、園内のハード面を補完する手段として、「PARK TRUCK(パークトラック)」と呼ばれる移動車両の運行も開始した。「PARK TRUCK」では、コーヒーなどのドリンクや焼き菓

子を提供するほか、区立図書館の本や絵本を用意し、公園内で自由に読むことができる。

公園の再生を検討する過程で、「井戸端かいぎ」を通じ、高齢者から子どもに至る様々な住民による社会活動への参画の機会が創出され、また、多世代間の住民の交流が行われるとともに、地域のコミュニティの場として再生された公園の場を通じ、多様な利用者間の新たな交流の創出も期待されている（図表1-2-8）。

図表1-2-8 井戸端かいぎ及びPARK TRUCKの様子



資料：豊島区提供

4. 年齢・障害の有無を超えた交流の促進

ボッチャの普及・啓発〔東京都多摩市〕

ユニバーサルスポーツ×年齢・障害の有無を超えた交流促進

「ボッチャ¹⁾」は、年齢・障害の有無を問わず多様な人々がプレーでき、高齢者や障害者も一緒に楽しむことができるユニバーサルスポーツである。

多摩市は、市内の特別支援学校が、地域団体や公立小中学校の交流にボッチャを活用してきたことをきっかけとして、ボッチャの普及・啓発に取り組んでいる。児童館、公民館においてボッチャの体験会を開催するほか、青少年問題協議会、社会福祉協議会等の地域団体や企業のイベントなどにおいても体験会や競技会が開催されており、その裾野が広がっている。

また、令和元(2019)年10月には、市内のチームのみならず、友好都市である長野県富士見町のチームも交えて、「ボッチャ2020TAMAカッププレ大会」を開催し、ボッチャを「知り」、「楽しむ」、「交流する」機会を通じて、「共生社会の実現」に向けた取組を進めている。

ボッチャというユニバーサルスポーツの普及に伴い、これに参加することによる年齢・障害の有無を超えた多様な人々の交流が促進され、様々な世代の人々に障害者の方々に対する理解が深まるとともに、地元の特別支援学校の生徒による大会メダル・参加賞の作成など障害者の方々が様々な形で役割を担うことを通じ、障害者の方々の活動の幅が広がることも期待されている（図表1-2-9）。

1) ボッチャ：ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障害者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目（一般社団法人日本ボッチャ協会HP）

図表1-2-9 ボッチャのプレ大会の様子



資料：多摩市提供